

には情報提供書を用いた返信のみならず、来院報告のFAX返信といったやりとりを行っている。今回演者らは、それら状況の把握を目的に検索を行った。

(対 象) 対象は平成12年12月より平成16年3月まで3年4か月間に奥羽大学歯学部附属病院を初診となった15,108名を対象とした。

(検索項目) 検索項目として、1. 紹介患者数の推移。2. 当院および口腔外科への紹介率。3. 地域別紹介患者数の推移。4. 紹介患者数とFAX返信数。5. 口腔外科および他科における未返信率。6. 他医療機関への紹介件数および返信状況の6項目とした。

(結 果) 1. 当院における初診患者数は月に最大560件、最小265件と月を追うごとに減少傾向を示していた。また、当院における紹介患者数は月に最大116件、最小54件でまた、口腔外科紹介患者数は月に最大97件、最小43件であった。2. 当院および口腔外科への紹介率は月を追うごとに増加傾向を示していた。平成14年度の平均紹介率は21.8%と初めて20%台を越え平成15年度の平均紹介率は29.0%とさらに増加を認めた。また、当院の紹介患者に対する口腔外科患者の占める割合は約60%から90%の間で推移し、紹介患者のうち口腔外科患者の占める割合のことが示唆された。3. 地域別紹介患者数では、当院の所在地である郡山市および近隣地域からの紹介および県南地域からの紹介患者が多かった。4. 平成12年12月医療連携係が医事課に設置されて以降、紹介元医療機関には来院報告のFAX返信数と紹介患者数との差は徐々になくなってきている。5. 口腔外科および他科における未返信率は医療連携係の設置当初は紹介に対する未返信率が両科ともに高い傾向にあったが、口腔外科では徐々に低くなる傾向にあり、他科では高い率で推移していた。6. 他医療機関からの返信状況では医科においての返信率は60%台であるのに対して、歯科においては低い返信率となっていた。歯科における返信の多くは医科大学附属病院、歯科大学附属病院や総合病院歯科口腔外科からで、開業歯科医からの返信は少数であった。

症例展示1) 平成15年度卒後研修過程修了生による症例報告

○石原誠一郎、福井 和徳、氷室 利彦
(奥羽大・歯・成長発育歯)

(症 例) 12歳11か月 男子

(主 訴) 上顎左側犬歯の萌出遅延

(所 見) 正貌は左右対称で、側貌はストレートタイプを呈していた。骨格系は、Skeletal Class I、歯系は臼歯関係がAngle Class I、上顎中切歯は舌側傾斜を示し、上顎左側乳犬歯は晩期残存していた。パノラマX線より上顎左側犬歯の口蓋側埋伏が認められた。アーチレングスディスクレパンシーは上顎 -2mm、下顎 -4mm、overjet +5.2mm、overbite +4.6mmであり、上顎歯列弓の狭窄が認められた。

(診 断) 上顎左側犬歯の埋伏をともなう過蓋咬合

(治療方針) 上顎左側犬歯の萌出スペース確保のためにクワドヘリックスを用いて側方拡大を行った後、上顎左側犬歯の開窓、牽引と叢生の改善をするためにマルチブラケット装置を用いる。

(治療経過) 上顎左側乳犬歯を抜去後、上顎左側犬歯の萌出スペース確保のためにクワドヘリックスを装着した。拡大終了後、.022×.028インチスロットのマルチブラケット装置を上下顎に装着し、治療を開始した。レベリング中に上顎左側犬歯の口蓋側からの萌出を確認したため、ブラケットを装着し、最終的に .019×.025インチステンレススチールワイヤーにて安定をはかり、動的治療を終了した。動的治療期間は2年7か月であった。保定開始後12か月を経過した現在でも、安定した咬合状態を維持している。

(考 察) 上顎左側犬歯は歯根がほぼ完成し、萌出時期が遅れていたが、萌出スペースを確保することにより自然萌出が促され、開窓、牽引を行わずに動的治療を終了できたものと思われる。